

高×大専社
 接続の視点で考える

社会の変化に対応する人材の育成に向けて、大学や専門学校では新たな教育プログラムや入試改革が進んでいる。本コーナーでは、今後の教育において重要なキーワードについて、高校と大学・専門学校・社会の接続の視点で考えていく。

キーワード

学校教育目標

管理職へのインタビューから読み解く「目指す学校像」

学校教育目標は、建学の精神や校訓などの「不易」と、社会の変化や生徒の現状などの「流行」の視点で考え、策定することが求められる。前号では社会の変化に応じて求められる資質・能力も変わってきていることを紹介したが、学校教育目標にもそうした変化は見られるのだろうか。3270校の高校の管理職を対象に、「目指す学校像」に関するインタビュー調査を実施し、その回答から学校教育目標に関するキーワードを抽出・集計したところ、公立・私立ともに「進路実現 進学実績」が1位となった(図1)。次いで、公立では「探究、課題解決」、私立では「魅力化、選ばれる学校」が挙げられた。私立については、生徒の獲得競争を背景に、選ばれる学校になることが至上命題となっており、それがうかがえる。また、

公立・私立ともに「探究、課題解決」が上位に挙げられた背景には、総合型・学校推薦型選抜の拡大が考えられる。公立高校を学科別に見ると、生徒の多様性に応じた特徴が表れている。例えば専門学科では、「探究、課題解決」よりも「基礎学力の向上」が上位に挙がっており、高校卒業後は就職する生徒が多く、社会で求められる基礎学力の定着を重視する傾向が見て取れる。総合学科では、「Well-being」を挙げる高校も見られたことから、多様化する生徒が安心して学べる環境づくりを使命と認識していることがうかがえる。

学校教育目標は学校のあり方を変えていく。次ページからは、校訓やブラデュエーション・ポリシーを基に教育活動を改善した事例を紹介する。

図1 学校教育目標に含まれるキーワード上位10

■公立・私立別

公立		私立		
1	進路実現、進学実績	32.0	進路実現、進学実績	38.6
2	探究、課題解決	19.7	魅力化、選ばれる学校	27.0
3	魅力化、選ばれる学校	15.7	探究、課題解決	11.5
4	基礎学力の向上	12.3	基礎学力の向上	8.3
5	DX、ICT、情報活用	9.3	働き方改革、業務改善	7.7
6	働き方改革、業務改善	9.1	グローバル、国際	6.6
7	地域、郷土、社会貢献	8.9	自立、主体性、Agency	6.5
8	自立、主体性、Agency	8.5	DX、ICT、情報活用	6.3
9	キャリア教育、実学教育	5.9	Well-being、安全・安心の場	4.2
10	グローバル、国際	4.1	キャリア教育、実学教育	2.7

■学科別(公立)

普通科		専門学科		総合学科		
1	進路実現、進学実績	35.8	進路実現、進学実績	26.2	進路実現、進学実績	25.4
2	探究、課題解決	22.5	基礎学力の向上	20.9	魅力化、選ばれる学校	20.4
3	魅力化、選ばれる学校	14.1	魅力化、選ばれる学校	15.7	探究、課題解決	17.1
4	働き方改革、業務改善	10.2	キャリア教育、実学教育	15.0	基礎学力の向上	13.3
5	自立、主体性、Agency	10.1	DX、ICT、情報活用	12.4	自立、主体性、Agency	10.5
6	DX、ICT、情報活用	9.1	探究、課題解決	11.8	働き方改革、業務改善	9.4
7	基礎学力の向上	8.6	地域、郷土、社会貢献	10.6	地域、郷土、社会貢献	8.3
8	地域、郷土、社会貢献	8.0	働き方改革、業務改善	7.9	Well-being、安全・安心の場	6.6
9	グローバル、国際	5.1	学習習慣、生活習慣、規範	6.1	キャリア教育、実学教育	6.1
10	STEAM、理数教育	3.2	自立、主体性、Agency	3.3	DX、ICT、情報活用	5.5

(%) 複数回答

※ 2025年3月～8月に、全国の高校の管理職を対象に「目指す学校像」についてインタビューを行い、その回答内容からキーワードを抽出して集計したもの。1校の回答に複数のキーワードが含まれていた場合もカウントしたため、合計は100%を超える。

スクール・ポリシーを「共通言語」に 教育活動をアップデート

兵庫県立姫路西高校

校訓・G.P.を基に 学校行事や校則を見直す

兵庫県立姫路西高校は「質実剛健・自主創造・友愛協調」という校訓の下、国際社会や地域社会に貢献できる人材の育成を目指している。デジタル化の急速な進展や、グローバルで予測困難な事象の増加など、社会そのもののあり方が大きく変化している一方で、近年では生徒の一部に受け身で挑戦を避ける傾向が同校においても散見された。そうした状況を受けて、ブラデュエーション・ポリシー（以下、G.P.）の一つである「自主的・自律的に行動し、様々な視点から課題解決をすることができるとする生徒を育成する」ことを実現するため、同校は2024年度から学校行事や校則の見直しを積極的に進めてきた。

千家弘行校長は「西高生らしさの原点が校訓である」と語る。「校訓は飾りではなく、日常の中で実践していくものです。『自主創造』をうたうのなら、生徒を信じて任せないといけません。服装も、その日の天気や行事の内容などのTPOを考えて判断できるようにすることが大切です」

生徒の振る舞いに校訓を具現化させたいという千家校長の考えの下、同校では、2024年度途中から夏季の私服登校を認めたり、チャイムを廃止したりするなど、校訓の「自主創造」の実現につながる自律的な判断と行動を促す仕掛けづくりを、生徒会の生徒たちなど話し合いながら進めてきた。

「学校行事が前年踏襲にならないように、各行事が校訓やG.P.などの実現にどのように貢献しているかを生徒の実態とともに常に精査し、改善点があれば年度途中であっても変更や廃止、内容の追加などを行っています。その際は職員会議などの場を活用して、校訓やG.P.を基にした判断であることをしっかりと伝えるようにしています」（千家校長）

校訓の具現化のために復活させた学校行事もある。25年12月、同校は「耐寒登山」を33年ぶりに1年次の行事として復活させた。「たくましい心身の錬成」をうたう学校として、280人の生徒全員で少し負荷のかかることに取り組んでみてほしいという教師たちの思いからだ。

SSHで育成したい力を 校訓を基に再定義する

同校におけるスクール・ミッションに基づいた教育活動のアップデートの代表例が、「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業を通して育てたい力」の設定プロセスだ。同校は第Ⅱ期SSH事業において、「姫路西築城メソッド」の実践を通じたあくなき探究心の育成を目標に掲げ、全教師・全生徒による探究学習を展開している。

2025年度からはSSH推進部と進路指導部が合併してキャリア探究統括部となり、探究学習と進路学習が3年間一貫して連動する体制を整えた。3年次には探究学習が高校生活の中でどのような意味を持つのかを客観的に認識し、志望校と探究学習を結びつける活動



校長
千家弘行
せんげ・ひろゆき
同校に赴任して2年目。



キャリア探究統括部長兼
進路指導部長
西川昌利
にしがわ・まさとし
同校に赴任して11年目。国語科。



SSH推進部長兼
国際理学科長
熊谷洋介
くまがい・ようすけ
同校に赴任して8年目。理科（物理）

学校概要
設立 1948（昭和23）年
形態 全日制／普通科・国際理学科／共学
生徒数（全日制） 1学年約280人
2025年度卒業生進路実績 国公立大は、東京大、京都大、大阪大、神戸大、岡山大、兵庫県立大などに175人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、関西学院大などに延べ268人が合格。

も取り入れている。SSHで育成したい力は一部の教師だけで決めたものではない。同校では定期的な二者面談・三者面談に加えて、教師から生徒に声をかけて行う不定期の面談や、質問に来た生徒との面談などがほぼ毎日のように行われており、生徒の個性や得意を見極めて、高い志望を持つように導いていくキャリア・カウンセラー

※プロフィールは、2026年3月時点のものです。

お勧めの分掌

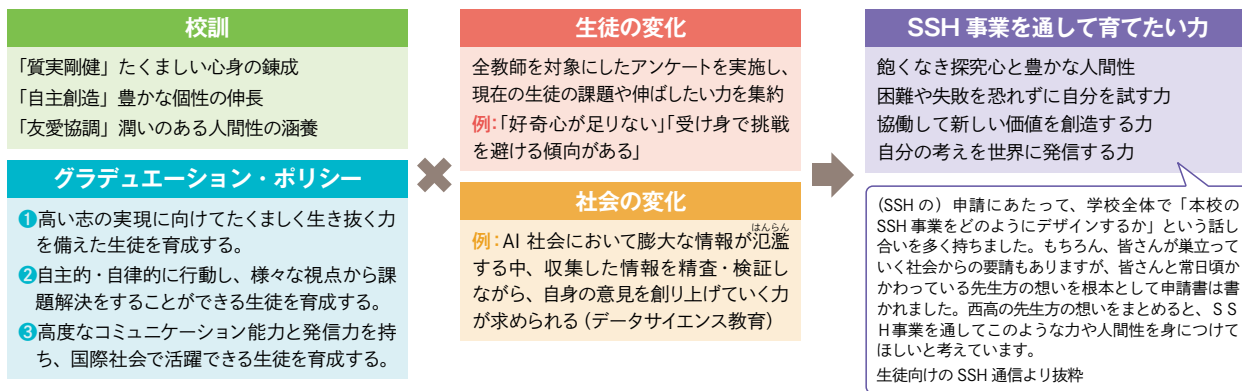
管理職

教務担当

進路担当

担任

図2 SSH 事業を通して育てたい力



※学校資料を基に編集部で作成。

ングの文化が校内に根づいている。そうした日常的な生徒の見取りを踏まえて、現在の生徒に何が足りないのかを全教師へのアンケートを通じて集約した。その後、SSH 推進部長の熊谷洋介先生や進路指導部長の西川昌利先生を中心に、集約した課題と社会の変化をすり合わせ、校訓やGP にひもづける形で整理し、「SSH 事業を通して育てたい力」として生徒と共有した(図2)。

「SSH で身につけてほしい力の設定にあたっては、日々生徒と向き合う教師の声をしっかりと反映したいと考え、全教師を対象にしたアンケートを実施し、その回答を基に、柱となる言葉をつくりました。校訓に沿いながらも、『変化の激しい未来を生き抜くために、こういう力を生徒に育みたい』といった先生方の日々の願いが集約されています。県内屈指の伝統校である本校にとって、SSH は比較的新しい取り組みであり、先生方に負担をかけていることは事実です。それでも、担当教科にかかわらず、多くの教師がSSH に前向きに取り組んでいるのは、生徒たちが探究に挑戦し、試行錯誤を重ねながら成長していく姿に刺激や手応えを感じているからではないでしょうか(熊谷先生)

客観的データと「共通言語」で生徒の背中を押す

同校では、SSH の活動を通じて開発した学校設定科目「データサイエンス教育」を3学年にわたって実施しており、データを基に考えるという文化が生徒、教師に根づいている。だからこそ、生徒、教師ともに、「SSH を通じてどんな力が、どのくらい身についたのかを客観的に把握したい」という思いを抱くようになっていった。

そこで、生徒の力を目に見える形で数値化して客観的に測るために、ベネッセの「GPSAcademic (*1)」を導入。「GPSAcademic」の受検結果を分析したところ、創造的思考などの能力が高い一方で、自己評価の面で伸びしろがあるなど、日々生徒に接する教師たちの実感と一致する結果が得られた。

「高い志を維持するには、生徒が自分自身のことを正しく理解することが何より大切です。創造的思考などの能力に関する数値を客観的に示すことで、生徒は自分の強みに気づき、自信を持つことができます。キャリア・カウンセリングを通じて、生徒の個性・得意を見極め、客観的なデータで生徒の納得度を高めることで、主体的な進路選択を全力で後押し

していきたいと考えています(西川先生)

トップの方針を浸透させる「共通言語」の力

学校の「不易」にあたる校訓を、社会の現状に合った形で具現化するため、GP をすべての教育活動の羅針盤として浸透させている同校。一つひとつの施策が、教師と生徒にとっての「共通言語」である校訓、GP にひもづけられているからこそ、学校全体への浸透が早く、納得感のある教育活動を展開できている。

「私は『例年通り』という言葉が好きではありません。時代が大きく変わっている以上、学校もそれに合わせて必要な変化を遂げていくべきだと考えています。もちろん、変革を進めていくためには生徒や教師が納得することが必要です。だからこそ、判断基準としての校訓、GP に加えて、客観的なデータと対話を大切にしています。生徒たちが伸び伸びと自分らしさを発揮し、これからの時代を切り拓くために必要な『もつと前面に出る気持ち』を自らの内面に育めるよう、これからも教育活動の改善を続けていきます(千家校長)

*1 ベネッセが提供する、「思考力」「姿勢・態度」「経験」の3つの観点から、問題発見・解決する力を測定し、生徒一人ひとりの「強み」を明らかにするアセスメント。

フォーキャストとバックキャストの 2つの視点を持つ

本連載の目的は、VUCA時代や人生100年時代という外部環境を踏まえ、「入試突破」「内定獲得」という短期的な目標に加えて、生涯学び続ける力や主体的なキャリア選択を見据えた中長期的な視点を持つことです。今号では、そうした社会の大きな変化を踏まえ、自校の存在意義やグラデュエーション・ポリシー（GP）などの目標を再定義する動きに着目しました。

そこで留意すべき点は、新たに掲げた目標が単なる「お題目」になってしまわないようにすることです。立派な目標が「お題目」で終わってしまう最大の要因は、当事者である教職員や生徒の理解が浅かったり、納得度が低かったりすることで、その目標が日々の一つひとつの教育活動に反映されていないことにあります。掲げた目標が現場の実態から乖離し、日々の授業や面談、学校行事といった具体的な場面で意識されていないければ、生徒の行動変容や価値観の醸成にはつながりません。

目標を絵に描いた餅にしないためには、学校教育目標が具現化されたエピソード（場面、行動、生徒像）を積み重ねていくことが大切です。今回ご紹介した兵庫県立姫路西高校の事例では、新たな目標を設定する際、全教師から、日々の面談や見取りを通じて「現在の生徒に何が足りないのか（例：受け身で挑戦を避ける傾向など）」を集約し、それを校訓やGPにひもづけて言語化していました。設定に際してだけでなく、設定後も客

(株)ベネッセコーポレーション
学校カンパニー 教育情報センター長*2
日山敦司 ひやま・あつし

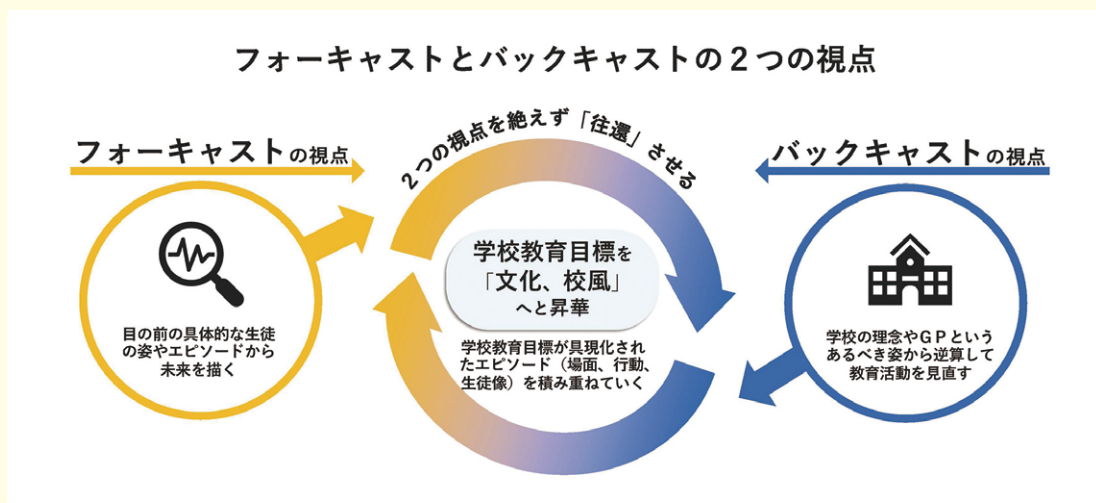


観的なデータと対話を用いて定期的に振り返りを行い、目標の共通言語化を丁寧に進めていました。

目の前の具体的な生徒の姿やエピソードから未来を描く「フォーキャスト」の視点と、学校の理念やGPというあるべき姿から逆算して教育活動を見直す「バックキャスト」の視点。その2つを行き来しながら、学校教育目標を学校の「文化、校風」へと昇華させることが重要です（図3）。例えば、生徒の意識調査アンケートや探究学習の記録といった客観的な資料に加えて、日々の授業や面談から得られた具体的なエピソードを教師同士で持ち寄り、「今の生徒の姿はGPのどの要素を体現しているか」「残る課題に対して、どの教育活動をどう見直すべきか」といった対話を定期的に重ねるのです。そのように全教師が対話を通じて、具体的な生徒像と目標をひもづけて言語化するステップを踏むことで、抽象的な目標が現場で深く共有され、生きた「共通言語」となっていきます。

学校教育目標が日々の実践を通じて教職員や生徒の間に確固たる文化として根づくことで初めて、これからの時代を主体的に生き抜く生徒を育む土台となるのです。

図3 学校教育目標を学校の文化・校風へと昇華させるための2つの視点



*2 2026年度より、教育情報センター長は渡辺健太に代わりました。